

# 地域医療連携室たより

No.33

発行日

2016年6月24日

医療法人社団松柏会  
至誠堂総合病院



地域医療連携室たより  
第33号

## 「禁煙外来」に力を入れていきたい



### 呼吸器内科

あら お つよし

### 荒生 剛 医師

日本内科学会認定医・総合内科  
専門医、呼吸器内科学会専門医、  
ICD制度協会インフェクショ  
ンコントロールドクター

荒生医師は山形大学医学部附属病院、山形県立中央病院、置賜総合病院、山形県立新庄病院を経て、今年4月1日、当院に着任致しました。これまでのこと、これからの事をインタビューしました。

### 医師をめざしたわけ、呼吸器内科を選んだわけ？

生まれは、山形県酒田市。3歳のころから気管支喘息だった。入院したことはなかったが、発作でたびたび近くの開業医で点滴を受けた。自分自身の病気がそうだったから、他の人よりは喘息のことがよくわかった。今は吸入薬などいい薬がでている。

高校生のころ医師を目指そうと考えた。山形大学医学部に入り、自然に専門は呼吸器内科を選んだ。

## 今まで心に残った患者さんは？

置賜総合病院にいた時、肺がんの患者さんを診ていた。70歳代、男性。半年間ほど病院で診た。彼はその後自宅に帰り、療養をした。往診はできなかったが、亡くなる前、家族とワインで乾杯をしたと聞いた。「生」をまっとうし、周りの人たちと穏やかななかで最後を迎えたのだなと思った。

医師になって3年目、研修中だった。やはり肺がんの患者さんがいた。

50歳代、男性。複数の医師でその患者さんを診ていた。状態が急変し、自分が指示を出し対処した。次の日から、彼は自分を主治医とまわりに言い、医師としての自分を認めてくれた。

## 当院に来て思ったこと、今後どのような医療をしていきたいか？

思ったより重症の方が多いと感じた。個別に化学療法などもしているんだなと思った。スタッフとともに自分で出来る限りのことをしていきたい。「禁煙外来」に力を入れていけたらと考える。喫煙をやめることによって、寿命が10年、20年延びると言われている。様々な薬も開発されている。タバコを吸いながらも徐々にやめていくことができるようになった。

## 趣味、ご家族は？

家族は妻と中学生の息子。

サッカー観戦に家族と時々行っている。家族はモンテディオのサポーター。自分は持病のことがあり、激しい運動はできなかったが、それでも高校の時は山岳部、大学の時は弓道部に所属していた。現在も山形市弓道連盟に加入している。

4月に着任以来、当院では高齢者に多い肺炎、呼吸器疾患を中心に診ています。とても優しい人柄。質問には「まだ、来たばかりですから。」と控えめです。

これからどうぞよろしくお願いいたします。

## ジャンボリー新入職員歓迎会開催

6月3日(金) 午後6時30分～

当院ジャンボリー委員会（若手職員の会）主催の新入職員歓迎会が開かれました。4月入職の新人職員、ベテラン職員が当院南隣の豊烈神社社務所に集合。60名程の参加あり。ビールで乾杯。それぞれの挨拶、ゲームで盛り上がり、明日の仕事へのパワーアップにつながりました。



新入職員自己紹介



高橋院長よりゲーム賞品授与

至誠堂総合病院 第15回地域連携交流会 開催

3月23日(水) 18:30～ 大手門パルズ

テーマ

# 生命をささえる地域づくり

第一部 シンポジウム 第二部 懇親会



いせい」の行仕宣子介護福祉士、当院消化器内科の瀬角英樹医師によるシンポジウムが行われました。座長は当院病院長高橋敬治、副院長伊藤英三が担当しました。

池澤医師は「在宅や施設での看取りのために」と題し、看取りに際し、医療、介護スタッフの構えとして、親身になること、親を看る様に接することの大切さに触れ、症例報告がありました。

行仕介護福祉士は「終末期の介護～自然な看取りから学んだこと～」と題し、老健施設で看取った取り組みを、ターミナルフローチャートや看取り計画書を提示しながら述べました。

瀬角医師は「死への準備教育を基礎にした満足死のすすめ～一人一人の生の物語を紡いで～」と題し、「平穏死」、「自然死」に対しあえて「満足死」を提唱。医療が必要なら医療を、我々スタッフが患者（利用者）、



第二部 懇親会 乾杯  
伊藤英三副院長

第15回地域連携交流会が大手門パルズにて開催されました。当日は市内の病院、福祉施設、介護事業所の職員の方々を迎え、251名の参加で、盛況のうちに終了しました。

施設や在宅への往診を中心にしている「池澤内科クリニック」の池澤嘉弘医師、介護老人保健施設「フローラさ



第一部 シンポジウム 閉会のあいさつ  
杉原保副院長

家族より希望を引き出す力を養い、死にゆく時間が満足のいくものであってほしいと。そのためにも、死への準備教育の大切さ、地域で情報の共有、スムーズで迅速な連携の必要性を述べました。

フロアから多くの発言がなされ、共感と同時に具体的な質問が出されました。患者さん（利用者さん）本人や御家族の想いに寄り添う医療、介護の地域づくりの大切さを確認しました。

シンポジウム終了後には懇親会が行われ、「顔の見える連携」がなされました。

## 熊本地震南阿蘇村支援

当院では、熊本震災支援として4月25日から4月28日まで看護師1名、4月28日から5月4日まで医師1名、4月29日から5月2日まで看護師1名、事務1名を派遣しました。

以下、当院消化器内科瀬角英樹医師の報告です。

### JMATの一員として仮設診療所の支援

当初、現地民医連院所の診療支援のつもりだったが、南阿蘇村の避難所に設置された仮設診療所の所長任務が与えられた。日本医師会災害医療チーム（JMAT）の一員として南阿蘇村久木野地区仮設診療所の業務、運営、他団体との連携がその任務であった。

### 避難所は自衛隊の炊き出しのみ

地震発生から2週間が経っていた避難所は、ライフラインは復活し物資も充足していたが、避難所としての位置付けであり上層部からの指示で運営されていた。食事は自衛隊の炊き出しのみ。入浴は巡回バスに乗って村の温泉施設へ。自家用車で動ける人は自分の好きなものを食べに行く事が出来たが、そうでない人は避難所に残っているのが必然で、炊き出しに飽きて食欲が低下したり、入浴出来ずにいた。

### 家の確保が重要

現地で何をしなければならぬのか、何が必要なのか模索し提案し行動した5日間を感じた事は、速やかに住む家を確保する事の重要性であった。食事や毛布そして医療も必要だが、住む家が無いと生活が崩壊する。現場で必要な支援を正確に掴み、発信し、必要な時に提供する事があるべき支援の姿であるが、そうならない現実を感じた。

### 現場で指揮を執る人の日常的な訓練が大切

災害はいつでもどこでも起きる可能性がある。それを絶対に忘れず訓練を積み重ねる事が必要である。現場で体を動かす人も大切だが、現場で指揮を執る人の訓練こそ

ももっとも重要だと感じた。

### 今を、夢を大切に

人生何が起ころか解らない。だからこそ、今を、夢を大切にしたいし、すべての人が大切にして欲しいと強く感じた。



自衛隊からの炊き出し  
野菜などもなくお年寄りには辛いメニュー



歌を届けた事から地元の合唱グループの活動も再開



仕事をやり遂げた診療所支援スタッフとともに  
後列、左から3番目が瀬角英樹医師



日本医療機能評価機構認定施設  
病院機能評価

**至誠堂総合病院**  
地域医療連携室  
山形市桜町7-44  
023-622-7551 (直通)  
<http://www.shiseido-hp.jp>  
E-mail [mail@shiseido-hp.jp](mailto:mail@shiseido-hp.jp)  
発行責任者 至誠堂総合病院  
小林 真司  
編集 地域医療連携室